

第69回名古屋春栄会
演目のあらかし

令和7年1月19日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
鶴亀（つるかめ）	2
六浦（むつら）	3
車僧（くるまそう）	4
老松（おいまつ）	5
采女（うねめ）	6
竜田（たつた）	7
鳩（ぬえ）	8
羽衣（はごろも）	9
放下僧（ほうかそう）	10
鞍馬天狗（くらまてんぐ）	11
敦盛（あつもり）	12
八重桜（やえざくら）	14
〔能のミ二知識〕	15

このリーフレットは、第69回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作 者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸い心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

鶴亀（つるかめ）

【分 類】初番目物（協能＝唐物） *楽

【作 者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

六浦（むつら）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） *序ノ舞

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審に思っていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているのを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞を舞いますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても。言葉残りて。鳥や鳴かまし。八声の鳥も数数に。八声の鳥も数数に。鐘も聞こゆる。明け方の空の。所は六浦の浦風山風。吹きしおり吹きしおり。散るもみじ葉の。月に照り添いて。からくれないの庭の面。明けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思えば木の間の月の。行くかと思えば木の間の月の。かげろう姿と。なりにけり。

車僧（くるまぞう）

【分 類】五番目物（切能）

【作 者】不明

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：天狗太郎坊（面・大癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

いつも牛のいない破れ車に乗って往来しているので「車僧」と呼ばれている奇僧がいました。ある雪の日、車僧はいつものとおり車に乗り、嵯峨野から西山の麓へやって来て、四方の雪景色を眺めて楽しんでます。するとそこへ、愛宕山の天狗が、山伏姿で現れ、この僧の奇行につけ込んで魔道に誘惑しようと、禅問答をしかけますが、軽くあしらわれてしまいます。そこで、自分は太郎坊だと名乗り、再度の挑戦を約して、雲に乗って飛び去ります。

<中入>

その後、溝越天狗と仇名される木葉天狗が出て来て、なんとか車僧を笑わせようと、さまざまなことをしますが、どうにもならず、これも逃げ去ってゆきます。やがて先の太郎坊が、今度は大天狗の姿で現れ、行くらべをいどみます。ところが、車僧の乗った牛もつけていない車は、太郎坊がいくら打っても動かなかつたのに、車僧が払子〔ほっす〕を一振りするだけで、自在に雪の山路を疾駆します。太郎坊はその法力に驚き、どうおどかしても自若としている態度に恐れ入り、仏法を妨げるのをあきらめ、ついには敬意を表して合掌して消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

不思議やなこの車の。不思議やなこの車の。ゆるぎ巡りて今までは。足弱車と見えつるが。牛も無く人も引かぬに。易す易すと遣りかけて飛ぶ。車とぞなりたりける。小車の山の陰野の道すがら。法の道の辺遊行して。貴賤の利益なすとかや。所から。ここは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡深き。車のわだちは足引の。大雪にはよも行かじ。げに雪山の道なりと。法の車路平かに。行くか行かぬかこの原の。草の小車雨添えて。打てども行かず。止むれば進むこの車の。法の力とて。嵯峨小倉大井嵐の。山河を飛び翔って。けばくすれども騒がばこそ。まことに奇特の車僧かな。あらたつとや恐ろしやと。がしょうをやわらげ大天狗は。合掌してこそ。失せにけれ。

老松（おいまつ）

【分 類】初番目物（協能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作 者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分...下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することになります。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞を舞い、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴亀の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

采女（うねめ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・小面）、後シテ：采女の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国をまわって歩いている旅の僧が、京都の寺々もほぼ見終わったので奈良へやって来ます。そして、春日の里につき、春日明神へ参詣します。すると、そこへ一人の女性がやって来て、木を植えます。僧が不審に思って言葉をかけると、その女性は、春日の神の由来、木を植えることの原因などを、詳しく話します。続いてその女性は、僧を猿沢の池に案内し、帝の寵愛を失った采女が、ここに入水したという物語をし、実は自分はその采女の幽霊だと告げて、池の底に姿を消します。

<中入>

僧は不思議な思いで、ちょうどやって来た土地の人に、もう一度春日の社の縁起と采女の死のことを尋ねます。里人も僧の会ったという女性の話を聞き、それは采女の亡霊だから、弔ってやるように勧めます。僧が回向をしていると、采女の亡霊が現れ、弔いを受けたことを喜び、仏教説話にあるように自分も変成男子となり、成仏して極楽に生れたことを述べます。続いて采女というものが、いかに人の心を和ませるのに役立ったかを語り、宮廷の酒宴の場で興を添えたときのことを思い起こして、舞を舞います。そして、御代を祝福しつつ、再び池の中へ消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

葛城の王。勅に従い陸奥の。忍ぶもぢずり誰もみな。こともおろそかなりとて。設けなんどしたりけれど。なおしもなどやらん。王の心解けざりしに。采女なりける女の。かわらけ取りし言の葉の。露の情に心解け歡感もって甚し。されば浅香山。影さえ見ゆる山の井の。浅くは人を思うかの。心の花開け。風もおさまり。雲静かに。安全をなすとかや。しかれば采女の戯れの。色音に移る花鳥の。とぶさに及ぶ雲の袖。影もめぐるや杯の。御遊のみ酒のおりおりは采女の衣の色添えて。大宮人の小忌衣。桜をかざす朝より。今日もくれはどり。声のあやをなす舞歌の曲。拍子を揃え。袂をひるがえして。遊楽回雪たる。采女の衣ぞ。妙なる。

竜田（たつた）

【分類】四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】金春禅竹

【主人公】前シテ：巫女（面・増女）、後シテ：竜田姫の神霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

日本六十余州の神社仏閣に納経を志す廻国の僧が、奈良の社寺を拝し終え、続いて河内国（大阪府）へと急いでいます。途中、竜田明神に参詣のため、竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、「竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなん」という古歌をひいて止めます。僧が、それは秋のことで、今はもう薄氷が張っている頃なのにと言うと、巫女は更に「竜田川 紅葉を閉づる 薄氷 渡らばそれも 中や絶えなん」という歌もあると答え、別の道から社前に案内します。そして、霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に、紅葉が神木であることを語ります。さらに竜田山の宮廻りをするうちに、巫女は、自分は竜田姫の神霊であると名乗って社殿の中へ姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、僧が社前で通夜をしていると、竜田姫の神霊が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美したあと、神楽を奏して、虚空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひしかたの。月も落ちくる。滝まつり。波の。竜田の。神のみ前に。神のみ前に。
散るはもみじ葉。すなわち神の幣。竜田の山陰の。時雨降る音は。きっさの鈴の
声。立つや川波は。それぞ白木綿。神風松風吹き乱れ吹き乱れ。もみじ葉散り飛ぶ
木綿附鳥の。み被も幣も。ひるがえる小忌衣。謹上再拝再拝再拝と。山河草木国土
治まりて。神はあがらせ。たまいけり。

鵜 (ぬえ)

【分 類】四・五番目物 (尾能)

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：舟人 (面・怪士)、後シテ：鵜の霊 (面・小飛出)

【あらすじ】 (今回の連吟の部分…下線部)

諸国を行脚する旅の僧が、三熊野へ参詣した後、都に上る途中、摂津国 (兵庫県) 芦屋の里に着きます。土地の者に宿を乞いますが、旅人に宿を貸すことが禁制になっているとのことで、洲崎の御堂で一夜を明かすことにします。夜更け頃、そこへ異様な風体をした者が、丸木舟に乗って漕ぎ寄せて来ます。不審に思っ言葉をかけると、自分は近衛院の御代に、頼政の矢先にかかって命を失った鵜の亡魂であると名乗り、その射止められたときの模様を詳しく語ります。僧は回向をし、成仏をすすめますが、舟人はまた丸木舟に乗って夜の波間に消えて行きます。

<中入>

土地の者が見舞いに来たので、旅僧は頼政の鵜退治の物語を所望します。語り終えた土地の者は、鵜の亡霊への供養をすすめて帰って行きます。僧が海辺で読経していると、鵜の亡霊が現れ、供養を感謝します。そして、夜毎に帝を悩ましたため、頼政に退治されたことを語り、これも天罰であったと懺悔し、頼政はその功で、主上より御剣を賜ったこと、その時、宇治の大臣と歌のやりとりがあり、それでも名を上げたことを物語ります。そして、自分はずつぽ舟に入れられて淀川に流され、この芦屋の浮き洲にとどまって成仏できないでいたのだと言い、僧の回向を頼んで、海中へと消えて行きます。

【詞章】 (今回の連吟の部分の抜粋)

頼政その時は。兵庫の頭とぞ申しける。たのみたる郎等には。猪の早太ただ一人めしぐしたり。わが身は二重の狩衣に。山鳥の尾にてはいだりける。尖矢ふたすじ滋藤の弓にとりそえて。御殿の大床に伺候して。ご悩の刻限を今や今やと。待ちいたり。さるほどに案のごとく。黒雲ひとむら立ち来たり。ご殿の上におおいたり。頼政きつと見あぐれば。雲中に怪しきものの姿あり。矢取ってうちつがい。南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。よっびきひょうど放つ矢に。手ごたえして。はたと当る。得たりやおうど矢叫びして。落つるところを猪の早太。つと寄りてつづけさまに。九刀ぞ刺いだりける。さて火をともしよく見れば。頭は猿尾は蛇。足手は虎のごとくにて。鳴く声ぬえに似たりけり。おそろしななども。おろかなる形なりけり。

羽衣（はごろも）

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

放下僧（ほうかそう）

【分類】 四番目物（現在物） *羯鼓〔かっこ〕

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

下野国（栃木県）の住人、眞木野左衛門は、相模国（神奈川県）の利根信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の眞木野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。

<中入>

一方、利根信俊は夢見が悪いので、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るといので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

青陽の春のあしたには。谷の戸出づる鶯の。凍れる涙とけそめて。雪消の水のうたかたに。あい宿りする蛙の声。聞けば心のあるものを。目に見ぬ秋を風に聞き。萩の葉そよぐ古里の。田面に落つる雁鳴きて。稲葉の雲の夕時雨。妻恋いかぬる小牡鹿の。たたずむ月を山に見て指を忘るる思いあり。由良の港の釣舟は。魚を得て釜を捨つ。これを見かれを聞く時は。峰の嵐や谷の声。夕べの煙朝霞。みなこれ。三界唯心の。ことわりなりとおぼしめし心を悟り。たまえや。

鞍馬天狗（くらまてんぐ）

【分 類】五番目物（天狗物） *舞働

【作 者】宮増

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：大天狗（面・大癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

鞍馬山の奥、僧正が谷に住む山伏が、鞍馬寺の人々の花見があると聞いてやって来ます。一方、西谷の能力が、東谷の僧のもとに花見への招きの文を届けます。東谷の一行は、その能力と共に西谷に来て、盛りの花を眺め、西谷の能力も稚児たちの慰みにと小舞を舞います。そこへ山伏が忽然と姿を現します。なんとなく興をそがれた一行は、そのまま帰ってしまいます。一人の稚児が残って、山伏に声をかけ一緒に花を見ようといひます。山伏はこの少年が源氏の棟梁の三男の沙那王（牛若丸）であることを知り、その境遇に同情し、花の名所を案内してまわります。牛若が好意に感謝してその名を尋ねると、山伏はこの山に住む大天狗であると名乗り、兵法を伝えるから平家を滅ぼすように勧め、明日の再会を約して飛び去ります。

<中入>

翌日、牛若が頭紋紗のはなやかな直垂姿で僧正が谷に来ると、大天狗が全国の名だたる天狗を引き連れて現れます。そして張良の故事を語り、兵法の秘伝を授け、夕刻になり、行く末の武運を守る事を約して消えうせます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

そもそも武略の誉の道。そもそも武略の誉の道。源平藤橘四家にもとりわき。かの家の水上は。清和天皇の後胤として。あらあら時節を考え来たるに。驕れる平家を西海に追っくだし。煙波蒼波の浮雲に飛行の自在をうけて。敵をたいらげ会稽をすすがん。おん身を守るべし。これまでなりや。おん暇申して立ち帰れば。牛若袂にすがりたまえば。また立ち帰り。げに名残あり。西海四海の合戦というとも。影身を離れず。弓矢の力を添え守るべし。頼めや頼めと夕陰暗き。頼めや頼めと夕陰鞍馬の。梢にかけて。失せにけり。

敦盛（あつもり）

【分類】二番目物（修羅物＝公達物） *中ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：草刈男（直面）、後シテ：平敦盛の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（今回の仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

一ノ谷の合戦で、当時十六歳であった平家の公達平敦盛を討ち取った熊谷直実は、あまりの痛ましさに、無常を感じ、武士を捨てて出家して蓮生と名乗ります。彼は敦盛の菩提を弔うため、再びかつての戦場、摂津国（兵庫県）一ノ谷を訪れます。すると、笛の音が聞こえ、数人の草刈男がやって来ます。その中の一人と笛の話をしているうちに、他の男達は立ち去りますが、その男だけが残っているため、蓮生が不審に思って尋ねると、自分が敦盛の霊であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

蓮生は、散策にやって来た須磨の浦の男に、一ノ谷の合戦、敦盛の最後について語ってもらいます。そして、自分は熊谷次郎直実であり、今は出家して敦盛の菩提を弔っているのだと明かします。そう聞いて、土地の男は感心し、敦盛の回向をするように言って立ち去ります。蓮生が夜もすがら念仏を唱え、その霊を弔っていると、武者姿の敦盛が現れ、平家一門の栄枯盛衰を語り、笛を吹き、今様を謡った最後の宴を懐かしんで舞います。続いて敦盛は討死の様子を見せ、その敵に巡り会ったので、仇を討とうとしますが、後生を弔っている今の蓮生はもはや敵ではないと、回向を頼んで消え去ります。

【詞章】（今回の仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

然るに平家。世をとって二十餘年。まことに一昔の。過るは夢のうちなれや。寿永の秋の葉の。四方の嵐にさそわれ。散りぢりになる一葉の。舟に浮き波に臥して夢にだにも帰らず。籠鳥の雲を恋い。帰雁行を乱るなる。空定めなき旅衣。日も重なりて年なみの。立ち帰る春の頃。この一の谷にこもりて。しばしはここに須磨の浦。うしろの山風吹き落ちて。野も冴えかえる海際の。船の夜となく昼となき。千鳥の声もわが袖も波にしおるる磯枕。海人の苦屋に共寝して。須磨人へのみ磯馴れ松の。立つるやうす煙。柴というもの折り敷きて。思いを須磨の山里の。かかる所に住まいして。須磨人となりはつる。一門の果ぞ。悲しき。

敦盛（あつもり）

【分類】二番目物（修羅物＝公達物） *中ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：草刈男（直面）、後シテ：平敦盛の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

一ノ谷の合戦で、当時十六歳であった平家の公達平敦盛を討ち取った熊谷直実は、あまりの痛ましさに、無常を感じ、武士を捨てて出家して蓮生と名乗ります。彼は敦盛の菩提を弔うため、再びかつての戦場、摂津国（兵庫県）一ノ谷を訪れます。すると、笛の音が聞こえ、数人の草刈男がやって来ます。その中の一人と笛の話をしているうちに、他の男達は立ち去りますが、その男だけが残っているので、蓮生が不審に思って尋ねると、自分が敦盛の霊であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

蓮生は、散策にやって来た須磨の浦の男に、一ノ谷の合戦、敦盛の最後について語ってもらいます。そして、自分は熊谷次郎直実であり、今は出家して敦盛の菩提を弔っているのだと明かします。そう聞いて、土地の男は感心し、敦盛の回向をするように言って立ち去ります。蓮生が夜もすがら念仏を唱え、その霊を弔っていると、武者姿の敦盛が現れ、平家一門の栄枯盛衰を語り、笛を吹き、今様を謡った最後の宴を懐かしんで舞います。続いて敦盛は討死の様子を見せ、その敵に巡り会ったので、仇を討とうとしますが、後生を弔っている今の蓮生はもはや敵ではないと、回向を頼んで消え去ります。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

さる程に。御船を始めて。一門の皆みな。我もわれもと舟に浮かめば。乗りおくれじと。汀にうち寄れば。御座船も兵船もはるかにのび給う。せん方なみに駒を控え。あきれ果てたる。有様かな。かかりける所に。かかりける所に。後より。熊谷の次郎直実。のがさじと追かけたり。敦盛も。馬引つかえして。波の打物ぬいて。二打ち三打ちは打つとぞ見えしが馬の上にて。引つ組んで波打ち際に。落ちかさなつてついに。打たれて失せし身の。因果はめぐり合いたり。敵はこれぞと打たんとするに。仇をば恩にて。法師の念仏してとむらはるれば。ついには誰も生まるべし。同じ蓮の蓮生法師。敵にてはなかりけり。あととむらいてたび給え。あととむらいてたびたまえ。

八重桜（やえざくら）

【分類】初番目物（脇能物） ＊神舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：宮守ノ翁（面・小尉）、後シテ：水谷神（面・大天神）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

のどかな春のある日、都の天皇に仕える臣下が、奈良の春日大社に参詣します。境内には、八重桜を仰ぎ愛でていた老人が一人、立ち去る気配はありません。臣下はそのわけを尋ねると、これが古人が「いにしへの 奈良の都の 八重桜 今日九重に 匂いぬるかな」という歌に詠んだ八重桜であると言い、春日大社の起こりについて詳しく語り始めます。そして我こそ水谷〔みずや〕神社の神の化身であることをほのめかして姿を消します。

<中入>

その夜のこと、臣下がゆめうつつの状態していると、水谷の神様が現れます。八重桜が咲き誇るなかで、平穩に栄える世を寿ぐのです。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

殊更時も相に逢。春の気色も一入に。匂い満ちくる桜木の。花の盛りは面白や。げに面白き桜木の。花も色そう春日野の。三笠の森の草も木も。枝をならさぬ。時津風。吹きおさまれる御代なれば。国富み民も豊かに。万歳を呼ばう三笠山。千秋の春の日の。曇らぬ御代ぞ久しき。曇らぬ御代ぞ。久しき。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるものです。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞います。仕舞扇をしていますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いませぬ。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うものです。平均して10~20分程度の長さになります。長刀や杖などの手道具は用いますが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるものです。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるものです。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもののことをいいます。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するものです。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合があります。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるものです。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるものです。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞。

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽[かぐら]: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踏的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>